

「神の愛を甘受する」

(マタイによる福音書 5:13-20)

イスラエルの民には、神からの律法が与えられていました。律法には、「これを守れば人は神から離れることなく、互いを大切にしあい、平和に生き続けることができる」という、神の人間への深い愛が溢れんばかりに込められていました。しかし人は、文字で記された律法を自分たちの都合の良いように解釈し、骨抜きにしてみました。人間の所有物になった途端、律法は愛し合うどころか、裁き合い、滅ぼし合うための道具になってしまったのです。今日の福音で「これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。」という主イエスの言葉は、律法を骨抜きにしている人間への強い警告です。「律法を完成するために来た」とは、律法に込められた神の深い愛を伝えること、その愛がこの世界に実現するためにこそ主イエスは来られた、ということです。

その主イエスが断言します。「塩になりなさい」でも、「光になりなさい」でもなく、断言です。「あなたがたは地の塩である。」「あなたがたは世の光である。」わたしたちはすでに、塩であり、光なのです。16節の「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。」という箇所直訳は、「あなたがたの光が輝きなさい」です。主イエスが期待しているのは、塩気も光もすでに与えられているのだから、すでに塩であり、光であるのだから、自ら塩気を無くしてしまったり、自ら光を覆い隠してはならないということです。

わたしたちは時として、わたしに塩気なんて、光なんて無いのではないかと思ってしまう。また、他者の塩味を消し、光を吹き消そうとしてしまうことだってあります。しかし、それではかつて律法を骨抜きにし、神の愛から離れてしまった人間と同じです。なぜなら、すでに塩気を、光を与えてくださっている神の恵み、愛を自らなきものにしてしまっているからです。そうではなく、主イエスの断言は、神の愛を甘受せよ！ということです。本当にわたしたち人間は愛を受け取ることが苦手です。しかし、わたしは塩だ、わたしは光だ。それで良いのです。

では神の愛はどこにあるのか。それこそ、キリストにあります。今日の使徒書にある通り、十字架につけられたキリストこそ栄光の主です。なぜなら十字架にこそ神の愛が示されたからです。クリスチャンとは、この主イエスの栄光の光を反射する者のこと、つまり、十字架上で両手を広げる主イエスの愛を全身にいただき、地の塩、世の光として生きるがクリスチャンなのです。